坊主子　墨子坊主

さらげといふ、相模にてなかやまといふ、

〔屠龍工隨筆〕人の幼稚なるは坊主子にして置事、久しきよりのならはせならん、源氏物語横笛の卷に、薫の幼き時をいひたる所に、かしらは露草して、殊さらに彩りたらん心地して、口つきうつくしうにほひとかきたるは、幼き人のつふり剃たるが、花田色に美しう、雛の中の裸人形を見たらん心地せらるゝよし、

〔歴世女装考三〕ちやん〳〵、おけし、はんかふ、

今俗に云やん〳〵とて、小兒の髪を頭の左右へ殘しおくは、禮記内則の爲髻とあるにおなじければ、古風なる事勿論なり、又おけしとて、頂にあるは、墨子粟の實の略圖形に似たるゆゑの名なるべし、清人は皆芥子坊主なれども、その以前明人の作りたる譯語全一冊に、髡頭爲輕便、婦人至嫁養髪とあれば、女子は十三四まではおけしとみえたり、けだし明國同一の風にはあらず、さて又小兒の耳の脇に毛をのこすをはんかふといひしを、近年はやつことといふ田舍にてはそりかけといふ奴はきこえたれどもはんかふの名義曉しがたかりしに、攝陽落穂集寫本、寛政の比大坂人詩因作、攝州有馬郡唐櫃村に限りて、半甲といふ事あり、出生の小兒の額と耳の脇に髪をおきて、うしろへはおかず、是をからひつ村の半甲といふ、近年見ぐるしとて然せざりし小兒ありしに、危難にて死せり、村人等懼て、舊例の如くにすとぞ、小兒の月代剃のこしたるを、浪花にて半甲そりといへど、唐櫃村の事は云る人稀なり、一條全文此書にてはんかふの名義瞭然たり、

深剪髪剪

〔歴世女装考三〕深剪　髪剪

中昔の書どもに、深曾岐、髪曾岐といふ事あまたみえたり、そのよしを書面に校ぶれば、二歳までは髪を剃り、三歳の春より髪を生じ、其子の誕生日に髪置の祝ひをなす、此時裳著もあり、さてかきたらしおく髪やゝ生ひのびて、帶のあたりにとゞくほどにいたれば、其兒の歳のほどにはか